

源氏物語と古事記神話(一)

杉 浦 一 雄

目 次

序

一 求婚譚の系譜

二 源泉としての古事記神話

三 玉鬘と須勢理毘売

四 鬘黒大将と大國主神——八千矛神——

序

『源氏物語』『玉鬘』の卷から「真木柱」の卷に至る所謂「玉鬘十帖」は、光源氏がみずからの「娘」として処遇する玉鬘を中心、六条院を舞台に繰り広げられる「玉鬘求婚譚」を本旨としている。並み居る貴公子たちの奪い合いを制し、最終的に玉鬘を手中に収めたのは鬘黒大将であった。「玉鬘十帖」の掉尾を飾る「真木柱」の卷には、鬘黒大将が光源氏の目を盗んで玉鬘を自邸へと連れ去る（六条院逃走の物語）が描かれている。

複数の貴公子による求婚譚は『竹取物語』や『宇津保物語』

にすでに先蹤があり、『源氏物語』はそれらを摂取したとも考えられるが、女主人公が夫となった男主人公によって奪い去られるという（六条院逃走の物語）は、それらとは明らかに異質な展開だということができよう。それならば、鬘黒大将による（六条院逃走の物語）は『源氏物語』の創作なのであるうか。むしろ、そうではなく、ここには何か別の作品が踏まえられているのではなからうか。

これまでに私は、『源氏物語』の根底には（日本神話）が深く関与し、『源氏物語』は（日本神話）を源泉として創作されたのではないかと考えてきた⁽¹⁾。もしもその発想に基づくならば、六条院を舞台とする（玉鬘十帖）の結末にも、その根底に（日本神話）が踏まえられている蓋然性が高いのではないか。

そこで、ここでは『源氏物語』（玉鬘十帖）の中から玉鬘と鬘黒大将との関わりを中心に取り上げ、玉鬘が『古事記』神話における須勢理毘売、鬘黒大将が大國主神をそれぞれモデルとし、鬘黒大将による（六条院逃走の物語）が、大國主神による（根之堅州國逃走の神話）を源泉として創作されたことを明らかにしてみたいと思う。

一 求婚譚の系譜

『源氏物語』における（玉鬘求婚譚）が、先行の『竹取物語』や『宇津保物語』を強く意識して書かれていることは周知の事実であろう。

たとえば、『竹取』においてかぐや姫をめぐる五人の貴公子たちが競い合うさまは、『源氏物語』の玉鬘をめぐる恋のさやあてを演じる貴公子たちに相当するといえることができる。

よう。また、『源氏物語』「藤袴」の巻の巻末において、数ある求婚者たちのうち蛸宮だけが唯一玉鬘から手紙を受け取り、「露ばかりなれどいとうれし」(「藤袴」の巻、三四五頁)(2)と感激しているのは、『竹取』における五人の貴公子のうち石上麿足^{いそのかみよりたり}だけが唯一かぐや姫から手紙を受け取り、「すこしうれし」(『竹取物語』、五六頁)(3)という心境になる場面を踏まえたものだということができるであろう。

また、『宇津保』においても、貴宮^{あてみや}をめぐって大勢の求婚者たちが登場し、求愛を繰り広げるさまは、玉鬘をめぐって大勢の求婚者たちが相争^{あひしり}うさまに相当するといえるであろう。また、玉鬘が尚侍^{なうし}となつて宮仕えする運びとなつていったのも、『宇津保』の貴宮が尚侍になつたことを擬えたものと考えることができよう。さらには、『源氏物語』「蛸」の巻で、玉鬘の寝姿を蛸の光を投げ込むことによつて覗き見ようとする場面は、『宇津保』「内侍のかみ」(別名「初秋」^{はつあき})の巻で、蛸火を用いて娘の美しい姿態を照らし出そうとする場面を踏まえたものだということができるであろう。

このように、『源氏物語』における〈玉鬘求婚譚〉は、『竹取』や『宇津保』の〈求婚譚〉を強く意識して書かれていることがわかるのである。

しかし、勿論、〈玉鬘求婚譚〉は、『竹取』や『宇津保』の〈求婚譚〉をただ単に踏襲したものではない。とりわけ、その結末に関してはその間に大きな相違が見られるのである。

『竹取』のかぐや姫は、五人の貴公子のいずれの求愛をも受け入れず、さらには帝からの所望をも拒絶して、結局月へと帰つてしまう。また、『宇津保』の貴宮は、並み居る懸想人たちの中から皇太子との縁組を選び取り、東宮入内によつて長く続いた〈貴宮求婚譚〉を終結している。これに対して『源氏

物語』では、尚侍出仕へと事が運ぶさなか、玉鬘は多くの懸想人たちのなかから、冷泉帝でもなく、蛸宮でもなく、結局これまでまるで好感をもっていなかった鬚黒大将と結ばれるという結末を迎えることになるのである。
この結末について、鎌倉時代に俊成卿女^{しゆんぜいきやうのむすめ}が書いたとされる『無名草子』には次のように記されている。

玉鬘の姫君こそ、好もしき人と聞こえつべけれ。みめ、容貌^{かたち}をはじめ、人さま、心ばへなど、いと思ふやうによき人にておはする上に、世にとりてとりどりにおはする大臣^{おとど}たち二人ながら左右の親にて、いづれもおろかならず数^{かず}まへられたるほど、いとあらまほしきを、その身にては、ただ尚侍^{なうし}にて冷泉院などにおぼしときめかされ、さらずは、年ごろ心深くおぼし入りたる兵部卿宮^{ひやうぶきやうのみや}の北の方などにもあらばよかりぬべきを、いと心づきなき鬚黒の大將の北の方になりて、……いといぶせく心やましき。

〔『無名草子』、一九四頁〕(4)

〔現代語訳〕玉鬘の姫君こそ、好感のもてる女性と申しあげるべきでしょう。外見、顔だちをはじめ、人柄、気だてなど、たいそう理想的で申し分のない女性でいらつしやる上に、世間でそれぞれに高い評価を得ておられる大臣たちが二人とも養父や実父で、どちらも並々でなく大事に扱われた様子は、たいそう好ましいのですが、そうした身としては、ただ尚侍として冷泉院などにご寵愛を受け、さもなければ、何年も真剣に思いをかけてくださった兵部卿宮の奥方などにでもなつていたらよかったですように、本当に気に入くない鬚黒の大將の奥方になつて、……たいそう憂うつで不快なのです。

これによれば、玉鬘は外見、人柄など理想的で申し分のない女性ではあるものの、冷泉帝の寵愛を受けるわけでもなく、長年真剣に思いをかけてくれた蛸宮と結ばれるわけでもなく、結局氣にくわない鬘黒大将と結ばれてしまったことが、憂鬱で不快だというのである。『無名草子』は、『源氏物語』における「心やましきこと」すなわち不愉快なことの例として「玉鬘の君の、鬘黒の大将の北の方になりたること。」（『無名草子』、二二八頁）を掲げているほど、玉鬘が鬘黒の手に落ちたという結末にただただ不快でならないのである。

これに対して、〈玉鬘求婚譚〉の結末を高く評価する見解も見られる。

玉鬘が御所参入の期が迫り、競争者達の運動が急を告ぐる時機を利用して、理外の理とも、自然の悪戯ともいふべき意外の結果をば見せたのであらう。（中略）処女美を守つて靡かぬ『竹取』も、理想的の順理で面白い。最高貴に靡く『宇津保』も、自然的の順理でまた面白い。しかしながら一たび試みられた計画が襲踏されてはならぬ。我れは両方を取つて、之れを踏まへつゝ、当の女も、男も、世間も全く予想し得なかつた「愛せざる者相契る」といふ、自然が稀に見せる皮肉を見せて、読者を驚かすであらう。（中略）『源氏』の作者が対玉鬘の妻争ひに於いて、前代未聞の不思議な筋立と描法とを試みたのは、恐らくかやうな創作心理によるのであらう。彼女は用語に於いて、句法に於いて、事例に於いて、筋立に於いて、趣意精神に於いて、傍若無人に広く前代の文学を借用した、同時に周到なる注意と、精微なる加工と、強烈なる燃焼力とによつて、同じ資料を見違へるばかりに向上させ、或

は別殊の魂を吹き込むことによつて、超越した新存在を現じさせた。（中略）『源氏物語』の前代文学摂取の力働は、かくの如く超越的に偉大なるものであつた。

（五十嵐力『平安朝文学史』下巻）（5）

玉鬘から真木柱に至る十帖は、従来の巻々とは異り、それぞれ体独立した纏りを持つてゐる。ここには登場人物も減少し、中篇小説的統一が見られる。これは作者の主題が別の所に存することを示すものである。ここでは、女主人公玉鬘を中心として、それを囲る幾多の男性を登場せしめ、玉鬘が誰の手に帰するかに興味の中心が置かれてゐる。しかも、嘗つて侮蔑の眼を以て眺めた鬘黒大将の掌中に帰するといふ意外な結末によつて、読者を煙にまいてゐる。ここに竹取・宇津保とつづいてきた求婚説話に新しい展開を見せた作者の野心的意図と、長篇作家としての技倆を窺ふことが出来る。

（池田龜鑑校註『源氏物語』一（日本古典全書）、「解説」）（6）

妻争ひは、上代の神話伝説以来かわることなく文学の主題となつてゐるが、『源氏物語』以前にこれを主要な興味としたものは『竹取物語』『宇津保物語』の二つである。（中略）『源氏物語』に描かれた妻争ひは、夕顔の遺児玉鬘をめぐるそれで、「玉鬘」から「真木柱」までの十帖にわたる。玉鬘は、はじめ冷泉帝以下多くの求婚者の誰にも靡こうとしなかつたが、後、源氏の尽力により尚侍として帝に侍することとなり、さらにその入内の直前、弁のおもとの媒介により、鬘黒の大将のものとなつてしま

う。これはかぐや姫が帝以下六人の求婚をしりぞけてついに昇天した理想的順理と、貴宮^{きみや}がついに東宮妃となつた自然的順理とをふまえつつ、さらにその上に出た意外の結末で、これによって理外の理とも言うべき人間の運命の皮肉を描いている点、前二作をはるかにしのぐものと言えよう。

(岡一男『源氏物語事典』)(7)

五十嵐氏は、玉鬘が鬚黒大将のものになった結末を、「理外の理」「自然の悪戯」ともいふべき「意外の結果」であると位置づけた上で、『源氏物語』の作者がこうした「前代未聞の不思議な筋立」「超越した新存在」を試みることができたのは、前代文学撰取の超越的で偉大な力量にあったと高く評価された。池田氏は、玉鬘がかつて侮蔑の眼をもつて眺めた鬚黒の掌中に帰するという「意外な結末」を『竹取』とも『宇津保』とも異なる求婚説話の「新しい展開」と位置づけた上で、「作者の野心的意図と、長篇作家としての技倆」を示すものとして高く評価された。また、岡氏は、〈玉鬘十帖〉の結末は、『竹取』の「理想的順理」とも、『宇津保』の「自然的順理」とも異なる「意表外の結末」と位置づけた上で、「理外の理とも言うべき人間の運命の皮肉」を描いている点で『竹取』『宇津保』を遙かに凌いでいると高く評価された。

すなわち、これらによれば、〈玉鬘求婚譚〉の結末をめぐつては、不快だとする見方がある一方で、『竹取』とも『宇津保』とも異なる独創的な結末だとして高く評価する見方もあることが知られるのである。

だが、こうした評価は褒めるにしろ貶すにしろいずれにしても時期尚早なのではなからうか。

たとえば、三氏が指摘するように、〈玉鬘十帖〉の結末は、

『竹取』『宇津保』と比較した場合、「意外な結末」であり「意表外の結末」と受け取ってよいように思える。しかし、だからといって、この結末を「前代未聞の不思議な筋立」だとか「理外の理」とも言うべき「新しい展開」と位置づけることには疑問があるように思われる。少なくともこの結末を「超越した新存在」であるとか、『竹取』『宇津保』とつづいてきた求婚説話に「新しい展開」を見せた作者の野心的意図」と高く評価する論調には躊躇せざるを得ないのである。

それというのも、私にはこの〈玉鬘求婚譚〉の結末には何か別の作品が踏まえられているように思われるからである。その作品こそ『古事記』の神話なのである。

二 源泉としての古事記神話

『源氏物語』における〈玉鬘求婚譚〉の結末には、〈日本神話〉が踏まえられているのではないか。

これまでに私は、『源氏物語』の主要な筋書きと人物設定が〈日本神話〉に基づいて書かれていることを指摘してきた。それによれば、光源氏は素戔鳴尊^{すさのあのみこと}をモデルとし、六条院は〈根の国〉を根底において創作されたのではないかと見ることができる。そのように考えるならば、ここに描かれた六条院もまた、素戔鳴尊が主宰した〈根の国〉を原型としているのではないか。

しかし、六条院のモデルとなった「根の国」について、『日本書紀』はまったくその実態を記していない。つまり、『日本書紀』には「根の国」の具体的な様相が一切記されていないのである。ところが、同じように〈日本神話〉を記しながらも、「根の国」の様相を如実に教えてくれる書物がある。それが

『古事記』である。『古事記』上巻には「根之堅州国」に渡った須佐之男命の具体的な活動が記され、「根之堅州国」での出来事をつぶさに知ることができるのである。無論、『日本書紀』における「根の国」と『古事記』における「根之堅州国」は別物であって、同列に扱い、通用させてはならないとする見解もある。(8)しかし、この場合、少なくとも『源氏物語』を間に置く限りにおいてはそれらをひと続きのものと理解しても支障がないように思われる。

私は、『源氏物語』における〈玉鬘求婚譚〉の結末には『古事記』の神話が踏まえられていると思う。

そこで、ここでは「根の国」と「根の堅州国」とを一連のものとして捉えた上で、『源氏物語』の物語と『古事記』の神話とを比較検討することによって、『源氏物語』における〈玉鬘求婚譚〉の結末が『古事記』の神話を根本的な源泉として創作されたことを明らかにしてみたいと思うのである。

玉鬘をめぐる『源氏物語』と『古事記』との共通点を、私は次の十一項目に挙げてみた。

- ① 女主人公とその父親との親子関係に問題が存する点。
- ② 男主人公がいずれも武器と関わる点。
- ③ 男主人公がいずれも特異な容姿を有する点。
- ④ 男主人公にはいずれにもすでに妻があり、その妻が常人とは異なった精神状態にある点。
- ⑤ 男主人公がいずれも火難に遭遇している点。
- ⑥ 男主人公の妻がいずれもみずから訣別している点。
- ⑦ 男主人公がいずれも女主人公を奪取している点。
- ⑧ 重要な小道具としていずれも琴が登場している点。
- ⑨ 女主人公がいずれも正妻となっている点。
- ⑩ 男主人公がいずれも天下を統治している点。

⑪ 男主人公がいずれも短期間で退任している点。
以下、その共通点を順次説明していこう。

三 玉鬘と須勢理毘売

① 女主人公とその父親との親子関係に問題が存する点。

『源氏物語』〈玉鬘求婚譚〉における特質の一つは、光源氏が実子ではない玉鬘をみずからの実子として処遇している点である。玉鬘は、実際には内大臣すなわち昔の頭中将と夕顔との間に生まれた娘であるが、源氏はそのことを世間にも身内にも隠して、あたかもみずからの実子を見つけ出したかのように振る舞い、実の親子だと偽っていたのである。

玉鬘発見の報告にやって来た右近に対して、源氏は次のように述べている。

さらば、かの人、このわたりに渡いたてまつらん。(中略)
我はかうさうさうしきに、おぼえぬ所より尋ね出だしたるとも言はんかし。すき者どもの心尽くさするくさはひにて、いといたうもてなさむ。

(『源氏物語』「玉鬘」の巻、一二二—一二三頁)

〔現代語訳〕そういうわけなら、その人をこの邸にお迎え申すとしよう。(中略)わたしはこうも子供が少なくて寂しいのだから、思いがけない所から捜し出した人だとも言うておこう。好色者たちに存分に気をもませる種として、それはたいせつに扱うことにしよう。

源氏は、自分に子どもが少ないことを理由に、玉鬘を思いがけない所から捜し出した人だと公言し、自分の娘として扱

うことにした。そこで、玉鬘は源氏の隠し子、すなわち源氏の実の娘として六条院入りを果たし、多くの男性たちの氣をもませる種「心尽くさするくさはひ」として仕立て挙げられることになっていったのである。

光源氏のこうした意思是、夕顔の死に接した直後からはじまっていた。夕顔の死後、侍女であった右近から、夕顔が内大臣に愛され、その間に幼い女の子が生まれていたことを知らされた源氏は、次のように発言している。

「さていづこにぞ。人にさとは知らせで我に得させよ。あとはかなくいみじと思ふ御形見に、いとうれしかるべくなん」とのたまふ。（『源氏物語』『夕顔』の巻、一八六頁）

〔現代語訳〕「それで、どこにいるの。誰にもそうとは知らせないで、わたしのものにさせておくれ。そうなれば、あつてなく亡くなったのが悲しくてならないあの人をしのお形見として、どんなにうれしいことか」とおっしゃる。

これによれば、光源氏が夕顔の遺児を引き取り、自分の子として育てたいという意思は、夕顔の死の直後から一貫して変わっていないことがわかる。つまり、亡き人の忘れ形見を光源氏が自分の子として育てるという筋書きは、『源氏物語』作者の単なる思いつきではなく、そもそもの設定であったことが窺えるのである。

こうしたなさぬ仲という親子の關係は一体どこから着想されたのであろうか。すぐに想起されるのは、『竹取物語』のかぐや姫と竹取翁との關係である。

『竹取』では、竹取翁が偶然にも成人前の少女を発見し、その子を自分の子として養育している。その意味では、玉鬘と

光源氏との關係はかぐや姫と竹取翁との關係に酷似しているということができるかも知れない。しかし、両者が大きく相違しているのは、竹取翁の場合には、かぐや姫が自分の子ではないことをはじめから明言している点である。

かぐや姫を宮仕えさせるようにという帝からの要請に対して、竹取翁は次のように奏上している。

「仰せのことのかしこさに、かの童を参らせむとて仕うまつれば、『宮仕へにいだしたてば死ぬべし』と申す。みやつこまろが手にうませたる子にてもあらず。昔、山にて見つけたる。かかれば、心ばせも世に人に似ずはべりと奏せさす。（『竹取物語』、六〇頁）

〔現代語訳〕「お言葉のもったいなさに、あの娘を入内させようとつとめましたところ、『もし宮仕へに差し出すならば、死ぬつもりです』と申します。あの子はこの造磨の手によって産ませた子ではありません。じつは、昔、山で見つけた子なのです。ですから、心の持ち方も、世間一般の人には似ても似つかないのでございます」と奏上する。

これによれば、竹取翁は、かぐや姫が実の娘ではないという事実を包み隠さず帝に奏上していることがわかる。こうした姿勢は相手が帝だから特別というのではなく、相手がたとえ五人の貴公子であろうとまったく同じなのである。

かぐや姫との結婚を願う五人の貴公子たちは、どんな悪天候の時でも休まずやって来ては、竹取翁に懇願するのだった。

この人々、在る時は、たけとりを呼びいでて、「娘を我に賜べ」と、伏し拝み、手をすりのたまへど、「おのが生さ

ぬ子なれば、心にもしたがはずなむある」といひて、月つき日ひすぐす。
〔『竹取物語』、二二頁〕

〔現代語訳〕この人々は、やってきては、竹取翁を呼び出して、「娘さんを私に下さい」と、伏し拝み、手をすりあわせておつしやるが、翁は、「私がつくった子でないのだから、思うとおりにはならないであります」と言つて、そのまま月日を過すごしている。

これによれば、懇願する五人の貴公子たちに向かつて、竹取翁は、かぐや姫は自分の娘ではないので思い通りにはならないと述べていることがわかる。つまり、竹取翁は、かぐや姫が自分の娘ではないという事実を誰はばかることなく、ありのままに表明しているのだ。

この点で『竹取』は、『源氏物語』とは大きく異なっているということが出来るであろう。

『源氏物語』においては、光源氏と玉鬘が実の親子ではないという事実は、源氏の息子たちには勿論、玉鬘の実父である内大臣にさえ蔽に伏せられていた。そのため、源氏の息子夕霧は玉鬘を実の姉と信じて恋情を思い留まり、内大臣の息子柏木は、玉鬘を実の姉とも知らずに恋慕する仕儀となった。さらに内大臣は、玉鬘に対して、どうせ「山がつの子」(「常夏」の巻、二二六頁)でもあらうと実の娘を見下すような発言さえすることにもなったのである。玉鬘が光源氏の娘ではなく、内大臣の娘であることを源氏みづからが明らかにしたのは、玉鬘発見の一年半後、玉鬘に裳着の儀式を行なった際においてである。その時まで、源氏は世間に対して、身内に對しても、玉鬘を思いがけない所から捜し出した自分の娘だと偽りつづけていたのである。この点で『源氏物語』は、同じ

ようになさぬ仲という間柄にありながらも、真の親子関係でないことをはじめから明言していた『竹取』とは大きく異なっているということが出来るであろう。

では、なぜ『源氏物語』の作者は光源氏と玉鬘に親子関係を偽るという特異な設定をほどこしたのであるうか。私はそこに『古事記』の神話が大きく関与しているように思うのである。

『古事記』上巻「根の堅州国」の場面をみてみると、須勢理毘売という娘が登場し、須佐之男命の娘とされていることがわかる。本文にある須勢理毘売の名には「其の女」(『古事記』上巻、八一頁)(9)という語が冠され、黄泉比良坂よもつひらさかにおける須佐之男命の祝福の言葉の中にも「我が女」(『古事記』上巻、八五頁)という語があつて、須勢理毘売が須佐之男の娘であることには疑いがないかに思える。

ところが、この須勢理毘売のあり方にはこれまでも疑問がもたれているのである。

そもそも、須勢理毘売は『日本書紀』にはまったく登場せず、『古事記』にしか姿を見せない。しかも、『古事記』での登場もこの時が初出で、須勢理毘売の名はこれまでに一度も触れられたことがないのである。それにもかかわらず、須勢理毘売はここに至つて、突然須佐之男命の「娘」として登場しているのだ。つまり、須佐之男命に須勢理毘売という妙齡の娘がいたことは、この時はじめて知らされるのである。

たとえば、『古事記』には、須佐之男命が娶った女性やその間に生まれた御子たちについて記した須佐之男命の系譜が記載されているが、そこには須勢理毘売の名は見当たらない。また、これだけでなく、須勢理毘売は、大国主神の正妻となっているので、大国主神の系譜に当然記されているはずである

が、そこにも須勢理毘売の名はないのである。

すなわち、須勢理毘売の名は父である須佐之男命の系譜にも、夫である大国主神の系譜にも一切書き記されていないのである。

須勢理毘売のこのようなあり方には、これまでも少なからず疑問が投げかけられてきた。

須勢理毘売については『古事記』では「嫡妻」とも「嫡后」とも冠して記している。『新撰字鏡』によれば「嫡」は「適」に同じで「牟加比女」または「毛止豆女」とあって正妻の意で、殊に「嫡后」と表記したのは、後の皇后に準じて、「后」の字を用いたのであるが、この用字からいって、大国主神の重要な意味をもつ正妻であったことを含めているといえる。ところが『古事記』は、この須勢理毘売の説話のすぐ後に記載する大国主神と十人の女性との間に生れた系譜には須勢理毘売の名も、その御子についても、何らの記載がないのであって、まことに不思議なことといわなければならない。

(三) 谷栄一『日本神話の基盤』(10)

これによれば、須勢理毘売は大国主神の「嫡妻」(『古事記』八五頁)とも「嫡后」(『古事記』八九頁)とも書かれているように正妻として重要な位置にありながら、大国主神の系譜にもその名はなく、その御子についても、何らの記載もないというのである。これを受けて、『日本神話事典』は、

スセリビメが記で「嫡妻」「嫡后」と書かれるのもオホクニヌシにとって重要な正妻であったからであろう。そう

であるのに、系譜にその名がみえないことに疑問がもたれている。(11)

と記し、西郷信綱氏は須勢理毘売登場の特異性をさして、「飛び入り」(12)と評されたのであった。

一体、『古事記』の本文において「其の女」「我が女」と繰り返し明記されているにもかかわらず、須佐之男の系譜にも、大国主の系譜にも一切記載がないとはどういうことなのであるか。そもそも須勢理毘売という女性には本当に須佐之男の娘なのであるか。須勢理毘売のこうしたあり方は、三谷氏が述べられたように「まことに不思議なこと」と言わざるを得ないのである。

『古事記』神話における、真の親子関係に疑問を呈さずにはいられないようなこうした女主人公のあり方が、『源氏物語』における玉鬘の設定に大きな影響を与えているのではなからうか。

『源氏物語』の作者は、『古事記』の神話をよく読んだ上で、『古事記』に登場する須勢理毘売が、須佐之男の「娘」として立派に処遇されているにもかかわらず、須佐之男の系譜にも大国主の系譜にもまったく記されていないという事実にも明らかな異和感を覚えたはずである。そこで、素性の明らかでない須勢理毘売を須佐之男の「娘」として唐突に登場させるという『古事記』の神話を踏まえた物語を創作することにしたのではないか。

勿論、『源氏物語』の作者は、玉鬘を夕顔との間に生まれた光源氏の実子として物語を展開させることもできたはずである。しかし、作者はそうした展開を採らずに、あくまでも実子でない娘を実子だと偽るという設定にこだわったというこ

とができよう。そうすることで、『古事記』に登場してくる須勢理毘売の素姓に看過しがたい問題があるという事実をここで披瀝しようとしたのではなからうか。

すなわち、光源氏が実子ではない娘をみずからの実子として処遇するという玉鬘の物語は、親子関係に疑義が存するという『古事記』神話をそもその源泉として着想された設定だったのである。

四 鬘黒大将と大国主神——八千矛神——

②男主人公がいずれも武器と関わる点。

さて、『源氏物語』〈玉鬘求婚譚〉における玉鬘が『古事記』に登場する須勢理毘売をモデルとしているとするならば、玉鬘と結ばれることになった鬘黒大将は、一体誰をモデルとして描かれたのであろうか。

須勢理毘売と結ばれたのは大穴牟遲神^{おおあなむぢのかみ}、後の大国主神だけである。ということは、『源氏物語』において玉鬘と結ばれた

鬘黒大将は、『古事記』における大国主神をモデルとして造型されたと考えてよいのではなからうか。〈求婚譚〉と言えば、一人の女性をめぐって複数の男性がしのぎを削るといった形式が普通だが、『古事記』においては須勢理毘売の相手となるのは大国主神のみである。ということは、『源氏物語』の〈玉鬘求婚譚〉は、もともと『古事記』における大国主の求婚神話を基軸とし、その上に複数の求婚者を付け加えることによって、これまでのような華やかな〈求婚譚〉として仕立て上げられたとみてよいのではなからうか。

さて、大国主神をモデルとする鬘黒大将は『源氏物語』のなかでどのように描かれているのであろうか。

玉鬘の夫君となった鬘黒大将の名はすでに「胡蝶」の巻から見えているが、玉鬘が鬘黒大将をはじめて実際に目にしたのは「行幸」の巻、冷泉帝の大原野行幸のおりであった。

この時、鬘黒大将は行幸につき従い、行列に供奉していた。

右大将^{うだいしやう}の、さばかり重りかによしめくも、今日の装ひ^{けふ}いとなまめきて、胡籙^{こりく}など負ひて仕うまつりたまへり……。
〔源氏物語〕「行幸」の巻、二九二頁

〔現代語訳〕右大将が、常はあれほど重々しく気どったお方ながら、——今日の装いはまことにはなやかで、胡籙^{こりく}などを背負ったりして供奉^{くふ}していらつしやる……。

ここで特に注目したいのは、この時の鬘黒大将のいでたちである。この時、鬘黒大将は行幸という晴れがましい盛儀に臨んで、武官の装いをなし、胡籙^{こりく}を身につけていた。

「胡籙」とは、「矢を納めて配属する器具。」〔有識故実大辞典〕（13）「矢を併わせての皆具（かいぐ）を胡籙と総称する。」〔国史大辞典〕（14）とあるように、「武官が矢を盛って背に負う武具。」〔源氏物語事典〕（15）のことである。この時鬘黒大将は、武官の装いを身にまとい、胡籙^{こりく}を背に負っていたのである。これは、まことに印象深いでたちではなからうか。

『源氏物語』における大原野行幸が歴史的事実を準拠としていることは、夙に『河海抄』が指摘している（16）。『河海抄』は、『源氏物語』「行幸」の巻に描かれた大原野行幸が、醍醐天皇延長六年（九二八）十二月五日に催された大原野行幸を準拠としているとして、醍醐天皇の皇子重明親王（九〇六—九五四）の日記『吏部王記』^{りほうわうき}逸文との類似点を指摘した。たしかに、これによれば行幸の時刻・参加者・鷹狩の際の服装・

六条院からの進物に至るまで『吏部王記』と酷似していることが認められる。ところが、こと大将の武装に関する限り、『李部王記』に淵源を見出すことはできない。ということは、鬚黒大将に武人の装いをさせ、胡籙を背負わせたのは、『源氏物語』作者の意向だったとみてよいのである。

では、なにゆえ『源氏物語』の作者は、鬚黒大将に武人の装いをさせ、胡籙を背負わせたのであろうか。

この鬚黒大将の武装について、一条兼良は『花鳥余情』において次のように指摘した。

西宮抄云公卿如例衛府公卿着弓箠又如例／今案大将は納言以下は弓箭をおふなり大臣大将は衛府をはつくらぬならひなりひけ黒の大將は大納言たるによりてやなくひをおひ侍るなり
(一条兼良『花鳥余情』第一六)(17)

『花鳥余情』は源高明(九一四—九八二)が著した有職故実の書『西宮記』の本文を引用した上で、納言以下は弓箭を負うものであるが、大臣兼任の大將は武官の装束をしないのがしきたりだと言ひ、大將である鬚黒はおそらく大納言を兼任していたために弓胡籙を背負っているのだと指摘した。つまり、『花鳥余情』は右大將である鬚黒が弓胡籙を帯しているのは、大納言を兼任しているからではないかと推測したのである。

諸注は揃ってこれを受けている。

大納言の大將は行幸の日はやなくひを負也大臣の大將は行幸の日も胡箠をはすして隨身にもたしむる也

(三条西実隆『細流抄』巻第六)(18)

今案大將は納言以下は弓箭をおふ也大臣大將は衛府をはつくらぬならひ也鬚黒大將は大納言なるによりてやなくひをおひ侍也
(九条植通『孟津抄』中巻)(19)

花云西宮抄云公卿如例衛府公卿着弓箠又如例今案大將ハ納言以下弓箠ヲ負事也大臣ノ大將ハ衛府ヲハツクラサル習也鬚黒ハ大納言ノ大將タルニ依テ箠ヲ負侍ル也云々
(中院通勝『岷江入楚』第三巻)(20)

大納言にて近衛大將を兼ねたれば弓箭を帶するなり。

(藤村作・笹川種郎・尾上八郎校注『源氏物語』中巻)(21)

行幸の日大納言の大將は自ら弓箭を帶する例。

(池田龜鑑校註『源氏物語』三(日本古典全書))(22)

大納言の大將が行幸に供奉する場合には自ら弓箭を帶する。又大臣の大將は胡籙を負はずに隨身に持たす。

(吉澤義則『対校源氏物語新釈』巻三)(23)

大將で納言を兼ねた人は、行幸の時、弓矢を負うのである。今、鬚黒は右大將で大納言であつたから、平胡籙を負うて供奉した。

(山岸徳平校注『源氏物語』三(日本古典文学大系))(24)

行幸などの際には、大臣兼任には要らぬが、大納言以下の大將は武官の装束をしてこれを負う。

(阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳『源氏物語』三(日本古典文学全集))(25)

『花鳥余情』は、大臣兼任の大將は武装せず、納言以下が弓箭きうせんを帶する例なので、髭黒の大將は、大納言であろうという。

(石田穰二・清水好子校注『源氏物語』四(新潮日本古典集成)(26)

大納言以下の大將は武官の装束。

(阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『源氏物語』五(完訳日本の古典)(27)

大臣兼任の大將は武装をしないが、納言兼任の大將は武装する。

(阿部秋生校注『源氏物語』三(校注古典叢書)(28)

行幸などの際は、大臣兼任の大將には要いらぬが、それ以下の大將は武官の装束。

(阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『源氏物語』③(新編日本古典文学全集)(29)

これらによれば、行幸に供奉するに際して、鬚黒大將が武装していることは大將が「大納言」を兼任しているからなのであろうと推定されていることがわかる。

しかしながら、玉上琢彌氏は『源氏物語評釈』において次のように述べられた。

左大將は大臣を兼ね、右大將は大臣以外が兼任することが多く、大臣兼任の大將は武官の装束をせず大納言以下の兼任する大將は武装する、と、言うのである。髭黒の

右大將は大臣でないことは確かだが、大納言兼任とは定められない、と思うが、『花鳥余情』の説をいちおう紹介する。
(玉上琢彌『源氏物語評釈』第六卷)(30)

玉上氏は、『花鳥余情』の指摘を紹介しつつも、鬚黒大將が「大納言兼任とは定められない」と疑問を呈されたのである。

たしかに、玉上氏が指摘されるように、この時の鬚黒大將が大納言を兼任していたかどうかは詳らかでない。それにもかかわらず、『源氏物語』の作者は鬚黒大將にわざわざ「胡籙」を背負わせたとみてよからう。つまり、『源氏物語』の作者は、大納言兼任という可能性を敢えて加えてまでも、是非ともこのときの鬚黒大將に武人の装いをさせ、胡籙を身につけた印象を強烈に残しておきたかったのである。

では、なにゆえ『源氏物語』の作者は、鬚黒大將に武人の装いをさせ、胡籙を身につけさせることにそこまでこだわったのであろうか。一つには、鬚黒大將のモデルである大國主神の属性が深く関わっていたからと考えることができよう。なぜなら、鬚黒大將のモデルとなった大國主は武器と深い関わりをもつ神だったからである。

『古事記』によると、鬚黒大將のモデルである大國主神の神名には複数の別名が伝えられている。

大國主神おほくにぬしのかみ。亦の名は、大穴牟遲神おほあなむぢのかみと謂ひ、亦の名は、葦原色許男神あしはらしこをのかみと謂ひ、亦の名は、八千矛神やちほこのかみと謂ひ、亦の名は、宇都志國玉神うつしくにたまのかみと謂ひ、并せて五つの名有り。

(『古事記』上卷「天照大御神と須佐之男命」、七五頁)

〔現代語訳〕大國主神おほくにぬしのかみ。またの名は、大穴牟遲神おほあなむぢのかみといい、ま

たの名は、葦原色許男神あしはらしこのおのみこといい、またの名は、八千矛神やちほこのかみとい、またの名は、宇都志国玉神うつしまのたまのみといい、合せて五つの名がある。

これによれば、大国主神の別名には大穴牟遲神・葦原色許男神・八千矛神・宇都志国玉神のあわせて五つの神名があることが知られる。ちなみに、『日本書紀』巻第一第八段一書第六には、さらに大物主神・国作大己貴命の別名があり、大国主神にはあわせて七つの神名が伝えられている。

このなかに「八千矛神」という呼称がある。「八千矛神」とは一体どのような神名なのであろうか。

諸注を挙げてみよう。

武威タケキイホヒの、八千ヤチデと多くの矛モウを持つ如きの意に称し御名なるべし、
(本居宣長『古事記伝』九之巻)(31)

八千矛を持つ神の義で、是も武威を称へた名である。

(次田潤『古事記新講』)(32)

何千も矛を持つ神の意味で、軍の神。

(中島悦次『古事記評釈』)(33)

多くの武器を有する神の義。軍隊を有してゐたことを示す。
(武田祐吉校註『日本書紀』一(日本古典全書))(34)

多くの矛を持った神の意で、武威をたたえたものであるう。

(倉野憲司・武田祐吉校註『古事記』(日本古典文学大系))(35)

多くの矛をもつ神。

(神田秀夫・太田善磨校註『古事記』上(日本古典全書))(36)

多くの武器を所有する神の義による神名。

(尾崎暢殃『古事記全講』)(37)

八千は、数の多いこと。戈の多いことは、強いことを示す。

(坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校註『日本書紀』上(日本古典文学大系))(38)

多くの矛を持った神の意。『出雲国風土記』には見えないので、大国主神の和大における別名であらう。

(萩原浅男校註・訳『古事記』(日本古典文学全集))(39)

多くの矛をもつ神、もしくは多くの矛である神の意……

(西郷信綱『古事記注釈』第一巻)(40)

多くの矛(戈)を持つてゐる神の意で、武威を称へた名であらう。

(倉野憲司『古事記全註釈』第三巻)(41)

名義は「多くの矛」。「八千」は多数を表す日本の聖数。「矛」は武器の一種。「大穴牟遲の神」は鉄神であるから、武神として活躍するときの名となる。

(西宮一民校註『古事記』(新潮日本古典集成))(42)

多くの矛ほこを持った神の意。大国主神の和大における別名であらう。

〔荻原浅男校注・訳『古事記』〔完訳日本の古典〕〕（43）

多くの矛を持つ武將の神。

（小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注・訳『日本書紀』①〔新編日本古典文学全集〕）（44）

多くの矛を持つ神の意。強大な武力を備えることによつて大国主たることをいう。／「八千矛神」は、大国主神を武力の面から呼ぶ名である。／「矛」は武力の象徴で、この神の武威の盛んなることをたたえる名。

（山口佳紀・神野志隆光校注・訳『古事記』〔新編日本古典文学全集〕）（45）

これらによれば、「八千矛神」とは多くの矛を持つ神のことで、強大な武力の所有者を意味しているということがわかる。つまり、八千矛神という神名は、大国主の数ある異名の中でもとりわけ武器と深い関わりを示す呼称なのである。ということとは、このことが『源氏物語』における鬚黒大将のいでたちに大きな影を落としていたのではなからうか。すなわち、この時の鬚黒大将が武装し、胡籙を身につけた姿で敢えて描かれているのは、鬚黒大将が「八千矛神」と異名をとつた大国主神をモデルとしていたからなのである。

しかしながら、鬚黒大将が胡籙を身につけた姿で描かれているのには、さらに重要な意味が隠されているように思われる。

ずっと先のことになるが、『古事記』の神話によれば、大国主神は須勢理毘売を奪い取って、根之堅州国から逃走するという行動に出る。この時の大国主神のいでたちを『古事記』

は次のように記している。

其の妻須世理毘売を負ひて、即ち其の大神の生大刀と生弓矢と、其の天の沼琴とを取り持ちて、逃げ出でし……。

（『古事記』上巻「大国主神」、八三頁）

〔現代語訳〕その妻須世理毘売を背負い、すぐにその大神の生大刀と生弓矢と、天の沼琴とを取って持って逃げ出した……。

これによれば、根之堅州国から逃走する大国主神は、須勢理毘売を背に負い、聖なる生大刀と生弓矢と天の沼琴とをたずさえていたことが知られるのである。ということは、玉鬘が行幸の際にはじめて目にした鬚黒大将が武装し、胡籙を身につけた姿で描かれていたのは、鬚黒大将こそが将来六条院から玉鬘を奪い去る人物であることをそれとなく暗示していたからではなからうか。

ここに用いられた「胡籙」の語は、『源氏物語』中唯一の用例である。けれども、この語は、鬚黒大将が「八千矛神」とも呼ばれた大国主神から造型されたことを、さらにはこの鬚黒こそが将来玉鬘を六条院から奪い取って逃走する人物であることをあらかじめ告げ知らせる象徴的な語だったといえるのである。

注

（1） 杉浦一雄「源氏物語の源泉」（『千葉商大紀要』第三七

巻第四号、二〇〇〇年三月）

杉浦一雄「源氏物語と根の国」（『千葉商大紀要』第

三八卷第一号、二〇〇〇年六月)

- (2) 『源氏物語』の本文と現代語訳は、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『源氏物語』(『源氏物語』

①) ⑥(新編日本古典文学全集)、小学館、一九九四—一九九八年)に拠る。

- (3) 『竹取物語』の本文と現代語訳は、片桐洋一校注・訳『竹取物語』(『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』(新編日本古典文学全集)、小学館、一九九四年)に拠る。

- (4) 『無名草子』の本文と現代語訳は、久保木哲夫校注・訳『無名草子』(『松浦宮物語 無名草子』(新編日本古典文学全集)、小学館、一九九九年)に拠る。

- (5) 五十嵐力『平安朝文学史』下巻(『日本文学全史』、東京堂、一九三九年、一二二—一二三頁)。

- (6) 池田龜鑑校註『源氏物語』一(『日本古典全書』、「解説」、朝日新聞社、一九四六年、二二—二三頁)。

- (7) 岡一男『源氏物語事典』I『源氏物語』の源泉、第七章「源泉と素材」、春秋社、一九六四年、二六四頁。

- (8) 神野志隆光『古事記の世界観』、吉川弘文館、一九八六年には次のようにある。

『日本書紀』では、『古事記』の「根之堅州国」に相当するものを「根国」ないし「根之国」と呼ぶ。「根之堅州国」は『古事記』としての独自の呼称である。これを明確にせずに、『古事記』『日本書紀』に通用させて「根の国」というような認識は、正當とはいえない。単に呼びかたの問題ではない。『古事記』『日本書紀』のそれぞれ独自の神話的世界像の問題として捉えるという立場にかかわるの

である。『古事記』の神話的世界としては「根之堅州国」であることをあいまいにしてはなるまい。(九三頁)

- (9) 『古事記』の本文と現代語訳は、山口佳紀・神野志隆光校注・訳『古事記』(新編日本古典文学全集)、小学館、一九九七年)に拠る。

- (10) 三谷栄一『日本神話の基盤——風土記の神々と神話文学——』、塙書房、一九七四年、四五—二頁。

- (11) 大林太良・吉田敦彦監修、青木周平・神田典城・西條勉・佐佐木隆・寺田恵子編『日本神話事典』、大和書房、一九九七年、一八二頁、担当執筆・中川ゆかり。

- (12) 西郷信綱『古事記注釈』第二巻、平凡社、一九七六年には、「スセリビメは、いわば飛び入りであって、さきのスサノヲの系譜にその名が出て来ない。ここには何か隠された意味がありそうである。」(三五頁)とある。

- (13) 鈴木敬三編『有識故実大辞典』、吉川弘文館、一九九六年、六八五頁、担当執筆・鈴木敬三。

- (14) 『国史大辞典』第一四巻、吉川弘文館、一九九三年、九二頁、担当執筆・鈴木敬三。

- (15) 池田龜鑑編『源氏物語事典』上巻、東京堂出版、一九六〇年、五二四頁、担当執筆・桜井祐三。

- (16) 四辻善成『河海抄』巻第一—(『河海抄』花鳥余情』(源氏物語古註釈大成)、日本図書センター、一九七八年、二六四—二六八頁参照)

- (17) 伊井春樹編『花鳥餘情』(『源氏物語古注集成』)、桜楓社、一九七八年、一九九頁。

- (18) 伊井春樹編『細流抄』(『源氏物語古注集成』)、桜楓社、一九八〇年、二三〇頁。

- (19) 野村精一編『孟津抄』中卷〈源氏物語古注集成〉、桜楓社、一九八一年、一八一頁。
- (20) 中田武司編『岷江入楚』第三卷〈源氏物語古注集成〉、桜楓社、一九八二年、一〇五頁。
- (21) 藤村作・笹川種郎・尾上八郎校注『源氏物語』中卷、博文館、一九二九年、九八頁、頭注。
- (22) 池田龜鑑校註『源氏物語』三〈日本古典全書〉、朝日新聞社、一九五〇年、二三七頁、頭注。
- (23) 吉澤義則『対校源氏物語新釈』卷三、平凡社、一九五二年、一二五頁、頭注。
- (24) 山岸德平校注『源氏物語』三〈日本古典文学大系〉、岩波書店、一九六一年、補注、四二七頁。
- (25) 阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳『源氏物語』三〈日本古典文学全集〉、小学館、一九七二年、二八四頁、頭注。
- (26) 石田穰二・清水好子校注『源氏物語』四〈新潮日本古典集成〉、新潮社、一九七九年、一四九頁、頭注。
- (27) 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『源氏物語』五〈完訳日本の古典〉、小学館、一九八五年、九一頁、脚注。
- (28) 阿部秋生校注『源氏物語』三〈校注古典叢書〉、明治書院、一九八七年、二〇四頁、頭注。
- (29) 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『源氏物語』③〈新編日本古典文学全集〉、小学館、一九九六年、二九二頁、頭注。
- (30) 玉上琢彌『源氏物語評釈』第六卷、角川書店、一九六六年、三二—三三頁。
- (31) 『本居宣長全集』第九卷、担当編集・大野晋、筑摩書房、一九六八年、四二二頁。
- (32) 次田潤『古事記新講』、明治書院、一九二四年、一三六頁。
- (33) 中島悦次『古事記評釈』、山海堂出版、一九三〇年、一一一頁。
- (34) 武田祐吉校註『日本書紀』一〈日本古典全書〉、朝日新聞社、一九四八年、一二二頁、頭注。
- (35) 倉野憲司・武田祐吉校注『古事記』(『古事記 祝詞』〈日本古典文学大系〉、岩波書店、一九五八年、九〇頁、頭注。)
- (36) 神田秀夫・太田善麿校註『古事記』上〈日本古典全書〉、朝日新聞社、一九六二年、二二四頁、頭注。
- (37) 尾崎暢殃『古事記全講』、加藤中道館、一九六六年、一三一頁。
- (38) 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀』上〈日本古典文学大系〉、岩波書店、一九六七年、二九頁、頭注。
- (39) 荻原浅男校注・訳『古事記』(『古事記 上代歌謠』〈日本古典文学全集〉、小学館、一九七三年、九一頁、頭注。)
- (40) 西郷信綱『古事記注釈』第一卷、平凡社、一九七五年、四〇一頁。
- (41) 倉野憲司『古事記全註釈』第三卷、三省堂、一九七六年、一七七頁。
- (42) 西宮一民校注『古事記』(『新潮日本古典集成』、新潮社、一九七九年、付録、三七七頁。
- (43) 荻原浅男校注・訳『古事記』(『完訳日本の古典』、小学館、一九八三年、四五頁、脚注。
- (44) 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・藏中進・毛利正

守校注・訳『日本書紀』①〈新編日本古典文学全集〉、
小学館、一九九四年、一〇二頁、頭注。
(45) 山口佳紀・神野志隆光校注・訳『古事記』〈新編日本
古典文学全集〉、小学館、一九九七年、七四・八五頁、頭
注。

〔抄 録〕

源氏物語と古事記神話（一）

杉浦 一雄

『源氏物語』の所謂〈玉鬘十帖〉は、玉鬘を中心にして六条院を舞台として繰り広げられる〈玉鬘求婚譚〉を本旨としている。並み居る貴公子たちの奪い合いを制し、最終的に玉鬘を手中に収めたのは鬘黒大将であった。〈玉鬘十帖〉の掉尾を飾る「真木柱」の巻には、鬘黒大将が光源氏の目を盗んで玉鬘を自邸へと連れ去る〈六条院退去の物語〉が描かれている。

これまでに私は、『源氏物語』の根底には〈日本神話〉が深く関与し、『源氏物語』は〈日本神話〉を源泉として執筆されたのではないかと考えてきた。もしもその発想に基づくならば、六条院を舞台とする〈玉鬘十帖〉の結末にも、その根底に〈日本神話〉が踏まえられている可能性が高いのではないか。

そこで、ここでは『源氏物語』の中から玉鬘と鬘黒大将との関わりを中心に取り上げ、鬘黒大将による〈六条院逃走の物語〉が、『古事記』の大国主神による〈根の堅州国逃走の神話〉を源泉として造型されたことを明らかにしてみたいと思う。

玉鬘をめぐる『源氏物語』と『古事記』との共通点について以下説明する。

- ①女主人公とその父親との親子関係に問題が存する点。
- ②男主人公がいずれも武器と関わる点。